

聴覚障害大学生の単語レベルの構音の分析 —構音方法に焦点を当てて—

○加藤誠一郎 加藤靖佳 湯浅哲也
 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) (筑波大学人間系) (筑波大学大学院人間総合科学研究科)
 KEY WORDS : 聴覚障害大学生 単語 構音方法

I. 問題の所在と目的

従来、聴覚障害者の構音の研究は単音節レベルでなされてきた。しかし、日常会話では単語以上の長さを持った音声の連鎖でやり取りがなされる。また、音節レベルでは明瞭に発音できていても、単語レベルになると明確に発音できなくなる場合がある。単語レベルの構音は構音結合が生じるため、単音節レベルの構音とは異なるからだと思われる。聴覚障害者の単音節レベルの構音と単語レベルの構音では、各構音の明瞭度は異なると考えられる。従って聴覚障害者の単語レベルの構音の特徴を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、聴覚障害大学生に単語検査を実施して、誤聴音節を構音方法別に集計して単語レベルの構音の特徴の一側面を明らかにするとともに、今後の発話やコミュニケーション指導にあたっての基礎的知見を得ることを目的とする。

II. 方法

(1) 対象者：音声言語を主なコミュニケーション手段とする聴覚障害大学生（感音性難聴、21歳）1名を対象とした。両耳の平均聴力レベルは、100dBであった。

(2) 評価者：健聴大学院生(23歳)1名を対象とした。

(3) 音読材料：千葉テストセンター『新版構音検査』の50語からなる単語リストを1枚の紙にまとめたものを用いた。

(4) 録音方法：実験は防音室内で行われた。聴覚障害大学生の音声は、口前15cmにセットしたマイクロホン(OLYMPUS ME34)を通して、ICレコーダ(ICD-UX565F)に録音した。1回音読させ、音声材料とした。

(5) 評価方法：検査語音はスピーカーを通して評価者に呈示された。聴取検査は防音室内で行われ、評価者はスピーカーから1~2mの位置に着席して聞き取りを行った。スピーカーから呈示された検査語音を至適レベルで可能な限り聞こえた通りに仮名表記した。

(6) 分析方法：誤聴された14音節の中で母音を除いた11音節を分析対象とした。誤聴音節を構音方法別に集計した。誤聴された11音節の構音方法別の音節数をリスト内の母音を除いた音節の構音方法別の音節数で除した割合を算出した。

(7) 倫理的配慮：本人に書面にて、個人情報保護、本研究以外で使わないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し同意を得た。

III. 結果

本実験で分析対象としたのは誤聴された14音節の中で母音を除いた11音節を分析対象とした。Fig1にリスト内の音節の構音方法別音節数の割合を示す。割合は均等ではない。

Fig2に、11音節の子音の構音方法をリストの全ての子音の構音方法で除した割合を示す。誤聴された音節の構音方法別の割合が最も高かったのは無声破擦音であり、66%が誤聴された。次に割合が高かったのは有声破擦音であり、33%であった。20%以上の割合で誤聴された子音の構音方法は有声破擦音と無声破擦音のみであった。無声摩擦音が誤聴された割合は15%であった。弾音が誤聴された割合は12%であった。無声破裂音が誤聴された割合は2%であった。誤聴された子音の中で有声破裂音と鼻音はみられなかった。

IV. 考察

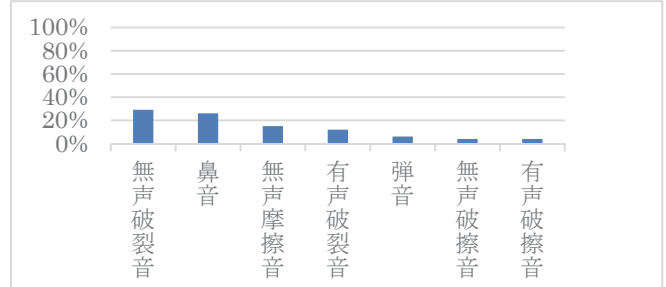


Fig.1 リスト内の音節の構音方法別音節数の割合

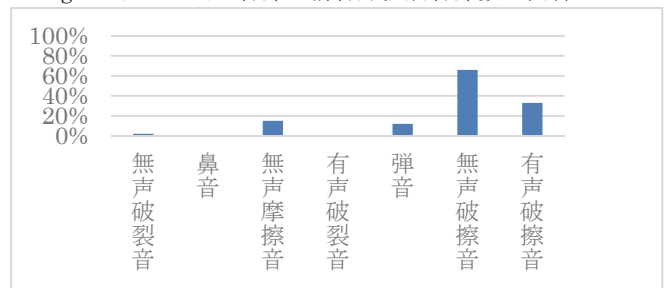


Fig.2 誤聴音節の構音方法別音節数の割合

本実験では構音方法別に誤聴音節を集計した。誤聴される割合が最も高かった構音方法は無声破擦音であり、次いで高かった構音方法は有声破擦音であった。

聴覚障害者の構音について、斎藤・星・志水・松木・小池(1985)は聴覚障害児に明瞭度検査を実施して構音方法別に明瞭度を算出した結果、最も明瞭度が低かった構音方法は破擦音であると示している。また、難聴学級児童に構音検査を実施した立本(1989)らは難聴学級在籍児童の典型的な構音障害は無声摩擦音や無声破裂音であると報告している。これらの研究は聴覚障害児の構音を単音節レベルで分析した研究であり、破擦音と摩擦音の明瞭度が低いことを示している。

単語は構音結合が生じるため、単音節とは構音方法別の明瞭度は異なると思われたが、本研究の結果と単音節レベルの明瞭度を調べた斎藤・星・志水・松木・小池(1985)と立本(1989)らの研究結果は同様の傾向を示している。聴覚障害者の単語レベルの構音での苦手な構音方法も単音節と同様に破擦音と摩擦音であることが示唆された。

今回は聴覚障害学生1名を対象に構音検査を実施したが、対象人数が少なく、個人差が考えられるため、さらに検討を重ねる必要がある。本研究では誤聴音節のみに着目して分析を行ったが、単語レベルの構音は前後の音節の影響を受けるため、誤聴音節の音声環境を考慮した分析を行い、誤聴音節と音声環境による影響について、考察を深めることが今後の課題である。

V. 文献

斎藤佐和・星龍雄・志水康雄・松木澄憲・小池啓介(1985)聴覚障害児の発音明瞭度に関する研究.筑波大学学校教育部紀要,7,91-105.

立本圭吾・進藤昌彦・志多真理子・安野友博・村上奏・大島渉・寺園富朗・小宮精一・真島玲子・塔之岡彰子・山崎祥子(1989)難聴学級児童の聴力・構音検査成績一定期健康診断を通して. Audiology Japan,32,755-762.

(KATO Seitaro, KATO Yasuyoshi, YUASA Tetsuya)